

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》(全 6 曲)が書かれた年代は、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の 4 つの舞曲を基本としながら、第 1 曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジグの前の第 5 曲に「メヌエツ／ガヴョツ／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

無伴奏チェロ組曲 第 1 番

ト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。第 1 曲プレリュードは本組曲のなかでも最も有名な楽章で、間断なく続く 16 分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第 2 曲は安らぎに満ちたアルマンド、第 3 曲はイタリア型の急速な 3 拍子によるクーラント、第 4 曲は優雅なサラバンド、第 5 曲には 2 つのメヌエツが用いられている。そして第 6 曲の軽快な短いジグで曲を閉じる。

無伴奏チェロ組曲 第 4 番

比較的地味な印象を受けるが、削ぎ落とされたようなシンプルさを備えている。第 1 曲は、分散和音の織りなす色合いが美しいプレリュード。第 2 曲は素朴なアルマンドで、第 3 曲のイタリア型クーラントは、リズムに新しい可能性を模索している。第 4 曲のサラバンドでは、清らかな旋律が和音をともなって歌われる。第 5 曲は同じ調性による対照的な 2 つのブーレ。第 6 曲はほとんど重音を用いず、速いテンポで流れていくジグ。

無伴奏チェロ組曲 第 5 番

全曲にわたりフランス風の性格を持っている。第 1 曲はフランス序曲形式のプレリュードで、荘厳な雰囲気が始まる序奏部に速いテンポの主部が続く。第 2 曲もフランス風のゆったりとしたアルマンド。第 3 曲は、軽快に駆け抜けるイタリア型とは異なり、繊細なリズムを持つフランス型クーラント。第 4 曲は、8 分音符の分散和音が深い瞑想へと誘うサラバンド。第 5 曲は躍動感ある第 1 ガヴョツに対し、第 2 ガヴョツは流れるような 3 連符が印象的。第 6 曲は、強拍部に付点リズムが置かれた特徴的なジグで曲を締めくくる。